

当院事務職員のスモンに関する認識度調査

坂井 研一 (国立病院機構南岡山医療センター脳神経内科)
麓 直浩 (国立病院機構南岡山医療センター脳神経内科)
河合 元子 (国立病院機構南岡山医療センター臨床研究部)
川端 宏樹 (国立病院機構南岡山医療センター地域医療連携室)
田邊 康之 (国立病院機構南岡山医療センター脳神経内科)

研究要旨

南岡山医療センターにおける、事務職員のスモンに関する認識度についてアンケート調査を通じて明らかにする。

A. 研究目的

岡山県は、スモン患者数が多い地域として知られている。一方、スモンに関する社会的認知度は歳月の経過と共に低くなりつつあり、岡山県も例外ではないと思われる。今回は、当院事務職員を対象としたアンケートを通じ、スモンの認知度を調査するのが目的である。

B. 研究方法

当院事務職員にスモンに関連したアンケートを2022年11月から12月にかけて行い、その集計データを解析した。アンケートの内容は、鈴鹿病院久留らの先行研究¹⁾を参考とした。(設問1) 回答者の職種。(設問2) スモンという病気の名前を知っているか。(設問3) どこで知ったか。(設問4) 原因を知っているか5択から選ぶ (a 薬の副作用・薬害、b ウイルス感染症、c 遺伝子変異、d 血管障害、e 原因不明)。(設問5) 関連語句はどれか4択から選ぶ (a HTLV-1、b キノホルム、c アンドロゲン受容体遺伝子、d 有機水銀)。(設問6) 症状を知っているか5択から選ぶ (a 視力障害・聴力障害・認知機能障害、b 聴力障害・認知機能障害・歩行障害、c 認知機能障害・歩行障害・異常感覚・しびれ感、d 視力障害・歩行障害・異常感覚・しびれ感)。(設問7) 正誤問題 スモン患者には女性の割合が高い、ほぼ日本特有の疾患である、現在、年間20人前後が発症している、スモンは難

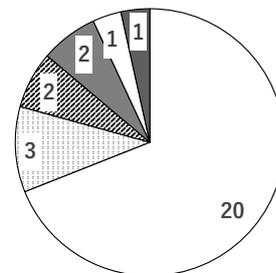
病に指定されている、スモン患者の検診は定期的に行われている、現在のスモン患者の平均年齢は20歳である。(設問8) スモン患者の担当経験はあるか。(設問9) 担当経験がある人は、気付いたことを述べてほしい。上記の内容で施行した。

(倫理面への配慮)

本研究では、患者個人の情報については無記名で行い、集積データとして扱う。個人にかかわる情報漏出の可能性は低いものと考えられる。

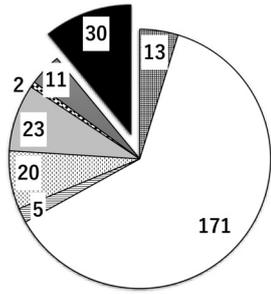
C. 研究結果

事務職員30名から回答が得られた。職種の内訳(図1)は事務20名、事務助手3名、診療情報管理士2名、医事2名、業務技術員1名、不明2名。なお以前に施行した調査²⁾も含めた職種別人数(図2)は、医師13名、看護師171名、看護助手5名、療養介助



□事務 □事務助手 ▨診療情報管理士 ■医事 □業務技術員 ■不明

図1 回答者の職種内訳



■医師 □看護師 □看護助手 □療養介助 □リハビリ □クラーク □職種不明 ■事務職員

図2 職種別回答者数 (前回までの調査含む)

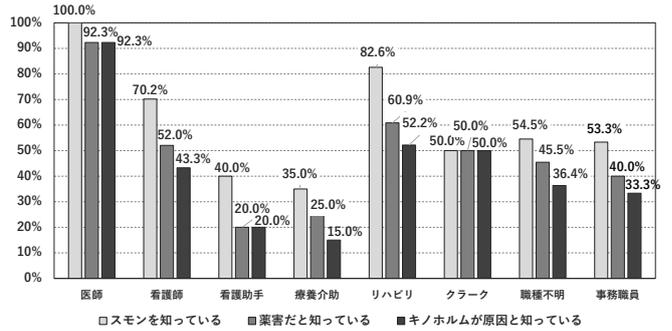


図6 スモンの原因を知っているか

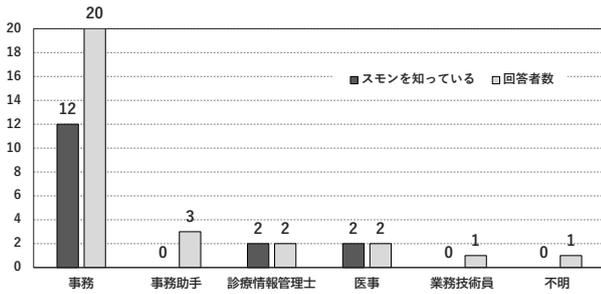


図3 スモンの病名を知っているか (事務職員のみ)

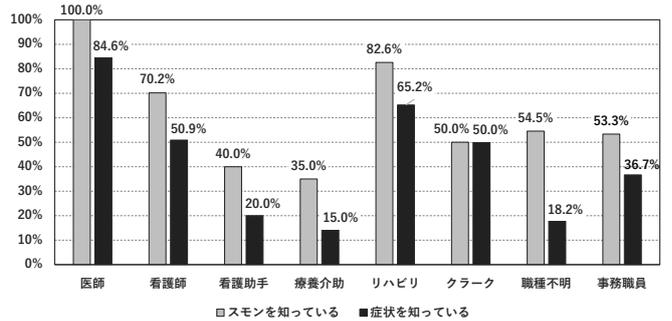


図7 スモンの症状を知っているか

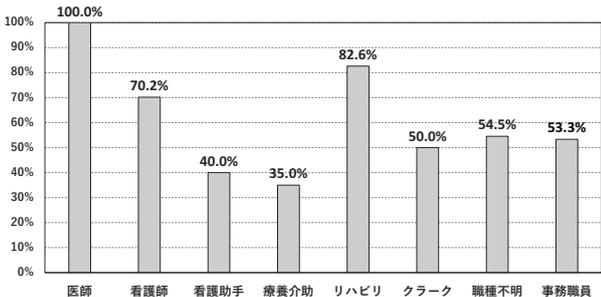


図4 スモンの病名を知っているか (他職種との比較)

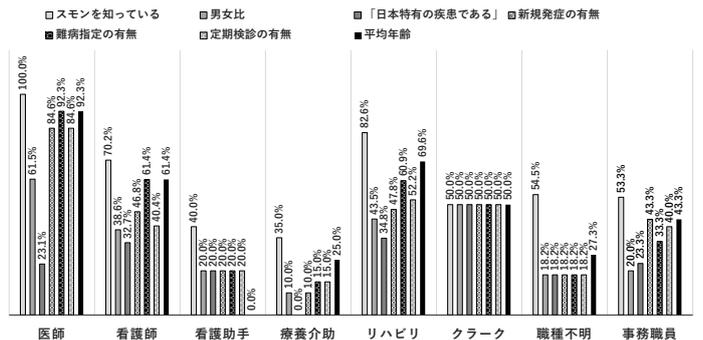


図8 正誤問題

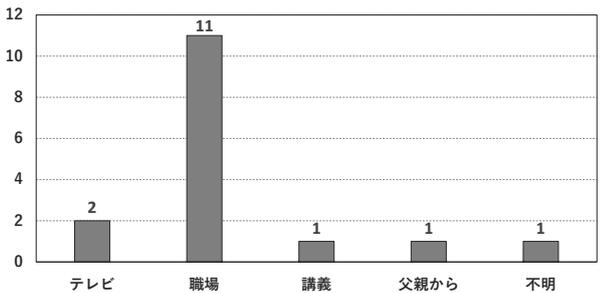


図5 どこで知ったか

員 20名、リハビリテーション担当者 23名、クラーク 2名、職種不明 11名、事務職員 30名である。以後の図では、他職種の回答結果と照らし合わせながら結果を示していく。

スモンという病気の名前 (図3) については、16 (53.3%) が「知っている」と答えた。他職種との比

較は図4で示した。

どこで聞いたかという質問 (図5) では、「職場」 (11名) が主であった。中には「テレビで見た」 (2名) 「父から聞いた」 (2名) という回答もあった。

病気の原因に関する質問 (図6) では、スモンを知っていると回答した事務職員 16名中 12名 (75%) が原因は「薬害」であると知っていた。原因薬剤が「キノホルム」であると知っていたのは 10名 (62.5%) であった。

症状に関する質問 (図7) では、「スモンを知っている」と答えた 16名のうちで正しい症状である「視力障害・歩行障害・異常感覚・しびれ感」を選択したのは 11名 (68.8%) であった。

正誤問題（図 8）では、スモン患者に女性の割合が高いことを知っていたのは 8 名（61.5%）、日本特有の疾患であることを知っていたのは 3 名（23.1%）、新規発症は見られなくなっていることを知っていたのは 11 名（84.6%）、難病に指定されていることを知っていたのは 12 名（92.3%）、定期的に検診が行われているのを知っていたのは 11 名（84.6%）、平均年齢が高いことを知っていたのは 12 名（92.3%）であった。

スモン患者を担当した経験があると回答した事務職員は今回の調査では存在しなかった。

D. 考察

スモンという病名を知っていた事務職員は約 50% 強で、うちキノホルムが原因である事は全体の 33% であった。新規発症がない事や患者の高齢化、それに伴い実際に担当する機会がなかった事が、事務職員におけるスモンの認知度に影響した可能性がある。啓発活動の必要性が今回の調査からも示唆された。

E. 結論

当院事務職員を対象に、スモンの認知度を調べる目的でアンケート調査を施行した。

スモンという病名を知っていたのは回答が得られた事務職員・診療情報管理士の約 50% であった。担当経験があるとの回答はなかった。一方、知っている職員の間ではキノホルムによる薬害である事は比較的認知されていた。

今回のアンケートも含めスモンに関する記憶風化を防ぐ取り組みの必要性が示唆された。

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

- 1) 久留聡, 村山晴香, 篠原麻綾, 横山尚子, 竹村真紀, 柏本愛, 山内慎吾, 小長谷正明: 当院職員・実習医学生のスモンに関する認知度調査 スモンに関する調査研究. 平成 24 年度総括・分担研究報告書 P 235-238, 2012
- 2) 坂井研一, 麓直浩, 河合元子, 川端宏樹, 田邊康之: 当院職員のスモンに関する認知度調査 スモンに関する調査研究. 平成 30 年度総括・分担研究報告書 P 241-244, 2018
- 3) 坂井研一, 麓直浩, 河合元子, 川端宏樹, 田邊康之: 当院医師のスモンに関する認知度調査 スモンに関する調査研究. 令和 2 年度総括・分担研究報告書 P 213-215, 2020
- 4) 小西哲朗, 大庭真理, 岡本博志, 門脇喜世子, 栗栖梨紗, 寺田菊枝: スモン検診実施病院における看護師のスモンについての意識調査～アンケート調査からみる今後の課題～ スモンに関する調査研究. 平成 22 年度総括・分担研究報告書 P 188-191, 2010
- 5) 犬塚貴, 田中優司, 保住功, 木村暁夫, 林祐一: 医療系学生を対象としたスモンに関するアンケート調査 スモンに関する調査研究. 平成 22 年度度総括・分担研究報告書 P 192-193, 2010
- 6) 小池亮子, 松原奈江, 野水伸子, 毛原のり子: 看護・介護専門職を対象としたスモンに関するアンケート調査 スモンに関する調査研究. 平成 23 年度度総括・分担研究報告書 P 221-223, 2011
- 7) 齋藤由扶子: 東名古屋病院におけるスモンに関する勉強会とアンケート調査 スモンに関する調査研究. 平成 23 年度度総括・分担研究報告書 P 224-225, 2011
- 8) 尾方克久, 鈴木幹也, 川井充: 在宅医療・療養支援職を対象としたスモンに関するアンケート調査 スモンに関する調査研究. 平成 21 年度度総括・分担研究報告書 P 186-188, 2009